

2023年度

<現代システム科学域>
小論文問題

注意事項

- 1 問題冊子は、監督者が「解答始め」の指示をするまで開かないこと。
- 2 問題冊子は全部で10ページ、解答用紙は全部で4枚、下書き用紙は全部で2枚である。脱落のあった場合には申し出ること。
- 3 解答用紙の各ページ所定欄に、それぞれ受験番号（最後のページは、左右2箇所）、氏名を必ず記入すること。なお、解答用紙は上部で接着してあるので、はがさず解答すること。
- 4 解答は、すべて解答用紙の所定欄に記入すること。
- 5 解答は、「横書き」にすること。
- 6 解答に字数の制限があるときは、句読点や記号を含めて数えること。
- 7 解答以外のことを書いたときは、該当箇所の解答を無効とすることがある。
- 8 問題冊子の余白は下書きに使用してもよい。
- 9 問題冊子及び下書き用紙は持ち帰ること。

問題訂正

科目名：前期日程 現代システム科学域

小論文問題

《訂正箇所》 10ページ 第2問 問2 上から1行目

誤

… 「管理や制限」 …

正

… 「管理による制限」 …

(余 白)

第1問

次のAおよびBの文章を読んで、あとの問いに答えよ。

A

2012年12月に大阪市立桜宮高校バスケットボール部の男子生徒が顧問から指導として平手打ちなどの体罰を受け自殺した問題から9年が過ぎた。スポーツの現場、指導者は変わったのか。今なお、暴力行為がはびこり、新たな問題も浮かび上がる。

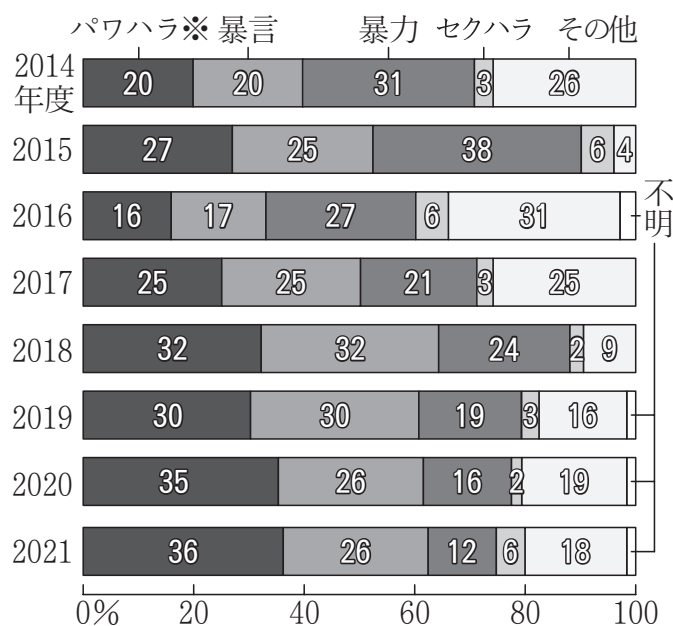
[中略]

「指導者の意識は変化してきたが、不適切な行為があるのは変わっていない。相談件数も増え続けている」。日本スポーツ協会スポーツ指導者育成部の栗原洋和さんはそう語る。

桜宮高の問題と柔道女子日本代表らが指導者から暴力やパワハラを受けていたことが13年1月に発覚。これらを契機に学校の運動部活動での指導ガイドライン、指導者らに対する処分基準が策定された。

同年4月、日本体育協会（現日本スポーツ協会＝JSPO）や日本オリンピック委員会（JOC）、全国高等学校体育連盟など5団体は「暴力行為根絶宣言」を採択した。指導者は体罰への意識を高め、ここからスポーツ指導は大きく変わったとされている。その後、各種団体に相談窓口が設置され、選手や保護者が声を上げやすい状況になった。

[以下略]



※暴言・暴力を除く（複数回答あり。2021年度は9月末現在）

図 JSPO暴力行為などの相談内容の推移

(出典：森合正範. 東京新聞TOKYO Web, <https://www.tokyo-np.co.jp/article/153312>, 2022年1月10日記事. ただし、引用にあたって一部の表記を省略し、一部を変更した)

B

著作権の都合により、公開しません。

著作権の都合により、公開しません。

著作権の都合により、公開しません。

(出典：忠鉢信一. 朝日新聞デジタル, <https://www.asahi.com/articles/ASQ573PTDQ4QUTQP027.html>, 2022年5月10日記事. ただし、引用にあたって一部の表記を省略し、一部を変更した)

問1

Aの文章と図が示すデータから、スポーツ指導現場における暴力行為などの不適切行為について、具体的にどのような問題が浮かび上がっていると考えられるか、最近の傾向を分析し、150字以内で説明せよ。

(配点 30点)

問2

Bの文章の下線部「私はその判断への違和感をぬぐえない」とあるが、筆者がそう考える理由について、どのようなことが考えられるか、文中で指摘されている問題点を踏まえ、120字以内で説明せよ。

(配点 20点)

問3

AおよびBの文章では、スポーツ指導における様々な問題がそれぞれ示されている。これらを踏まえた上で、今後のスポーツ指導や学校での部活動指導の具体的な改善方法について、あなたの考えを450字以内で述べよ。

(配点 50点)

(余 白)

第2問

次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

たくさんの当事者と出会い、話をしているうちに、「やさしさって何だろう？」と考えるようになりました。

私は道に迷いながらもひとりで行動することの大切さを多くの当事者から学びましたが、支援者や家族は、当事者が困らないように先回りし、リスクを回避したり、道に迷うからと常に送り迎えをしたりします。それが、「やさしさ」だと考えているのだと思います。

しかし、その「やさしさ」によって、当事者は気持ちが落ちこんでしまいます。認知症の診断を受けた後、将来がみえなくなり、不安と恐怖から目の前が真っ暗になってしまいます。それだけでも大変なのに、まわりの人たちの「やさしさ」によって、さらに絶望してしまいます。

「なぜ、まわりの人たちがやさしくしているのに、気持ちが落ちこむのだろうか？」とみなさんは思うかもしれません。私が出会ってきた当事者のなかには、診断直後から、家族に「ひとりで出かけるのを禁止された」「財布を取り上げられた」と言う人がたくさんいました。「運転免許証を奪われた」「すべてを奪われた」と言う人もいました。家族は、当事者のことが心配なのだと思いますが、自分がされたいやな「管理による制限」をあたりまえのようにしてしまいます。それは「認知症だから道に迷ってしまう」「認知症だから物を失くしてしまう」というような、「心配からくるやさしさ」なのですが、当事者にとってみれば、「心配からくる生活の支配」ということになるのです。認知症と診断されただけで「何も自分で決められない生活」が始まるのです。

[中略]

さらに、何とか進行を遅らせたいという家族の「やさしさ」から、脳力トレーニングやドリル、100から7引いて歩こうなどの「認知症予防に効果がある」とされることをやらされる当事者もいます。また、「サプリメント」や「食用オイル」「アロマ」などを次々に試すように言われたり、グルテンフリーがよいと聞けば小麦なども禁止されたりしてしまいます。さらにお酒もよくないと勝手に決めつけられ、禁止されてしまいます。

このような環境のなかで、当事者はますます笑顔を失っていきます。その結果、次第に元気もなくなり、家の中で過ごすことが増えます。そうになると、症状が進行したと思われる、「症状が改善するように」「人と交わったほうがよいから」と行きたくもないデイサー

ビスを勧められます。

ある女性の当事者は、「化粧もしないで人前に出るのは恥ずかしい」と思っているのに、「人と交わったほうがよいから」と、無理やり外に連れ出されると言っていました。認知症になる前は、すっぴんで人前に出ることがなかった女性が、認知症になると化粧をさせてもらえず、すっぴんで外出させられるのです。それで「出かけるのはいやだ」と思うのはあたりまえではないでしょうか。怒って抵抗するのもあたりまえのことです。

しかし、その怒ったり、抵抗したりする行動が「認知症の症状」だと思われてしまいます。そして、「すぐに怒るようになった」「何もできなくなった」とレッテルを貼られて、何でも先回りされてしまいます。やりたいことも制限されてしまいます。この一連の流れが、認知症になると多くの当事者に起こることなのです。

認知症の症状はあるかもしれませんが、診断名がついただけで、「その人」自身は何も変わっていません。認知症と診断された次の日から、何かが変わるわけではありません。1週間後、1か月後も何も変わらないはずなのに、まわりの人たちが変わってしまい、これまで過ごしてきた自分の生活環境がすべて変わってしまうという経験をするのです。

「なぜ、認知症と診断されることで環境が変わってしまうのか？」ということを経験した多くの当事者と一緒に考えてきました。多くの当事者は、まわりの人たちの「やさしさによる善意」に支配されています。

一人暮らしをしてきた人は「火の不始末が怖いので、一人暮らしはやめたほうがよい」と言われています。その人は「まわりから言われれば言われるほど、自分に自信がなくなってくる」と言っていました。まわりの人たちは、「心配している」と言いますが、それが本当にその人のためなのでしょう。その人のためではなく、まわりの人たちが安心するための行動ではないのでしょうか。家族や支援者の「善意」が当事者の生活を制限してしまい、当事者のできることまで奪ってしまうのです。

(出典：丹野智文. 「認知症でもできること」から「認知症だからできること」へ. 『認知症とともにあたりまえに生きていく』. 中央法規出版, 2021年. ただし、引用にあたって一部の表記を省略し、一部を変更した)

(注) 著者の丹野智文さんは2014年、39歳の時に若年性アルツハイマー病と診断された。現在も仕事を続けながら、認知症の当事者として、講演や書籍の出版など、様々な社会的活動をしている。

問1

下線部の「何も自分で決められない生活」とはどんな暮らしか、問題文に則して具体的に200字以内で説明せよ。

(配点 30点)

問2

認知症とともに生きる人々に対して、家族や支援者が「管理や制限」をする理由を、著者はどう考えているか、100字以内で説明せよ。

(配点 20点)

問3

あなたのこれまでの認知症に関する理解と、この問題文に書かれていることを比較し、違いや共通点について記したうえで、今後の認知症の方への支援方法について、あなたの考えを400字以内で述べよ。

(配点 50点)